

<p>第 54 号 平成 25 年 5 月号 HPに 創刊号から 連載中</p>	<h1>もう一つの道</h1> <p>情報は、うのみにせず、注意深く徐々に試してください。</p>	<p>山田整骨院 熊本市中央区出水 4 - 25 - 1 096 - 364 - 7611 http://yamadasu.com/ 熊本交通事故、山田整骨院 <input type="button" value="検索"/> http://www.jiko-kumamoto.net/</p>
--	---	--

人事不省の大怪我から再生 ハワイ会員 岡田八十八
昭和 38 年 2 月号 月刊西医学

西式を知るまで

私の郷里は山口県柳井市である。明治 22 年 4 月 15 日生まれだから、満 74 才になるわけである。

私がハワイに渡ったのは 17 才の時、最初は砂糖栽培の工場に働いていた。そして 40 才の時に独立して、自動車工場を作った。私は 60 才を境目として、いわゆる世の中の為になる奉仕の生活に入ったのである。奉仕の生活というと宗教的にひびくが、私の場合は西式生活がそれである。

私は若い時から元気であった。その元気にまかせて無理な生活を続けた為に、よく病気にかかったし怪我もしたものだ。脚は 2 回も折り、腰を強打して立てなくなったこともある。

病気のうちで、一番ひどかったのは胃潰瘍で、一週間に一度はきっと吐血する状態であった。日本にいた時から、医学はドイツが一番進んでいると聞かされていたので、私はハワイでもドイツ人の医者を探してかかったが、なかなか治らなかった。いやその医者は助手に、この病人は 40 才まで生きられまいと私語しているのを、私は聞いたのである。

1936 年（昭和 11 年）に、西先生が米国の講演旅行の帰途ハワイに立寄られて講演された。私は不思議な縁で先生の講演を聴く機会を得た。私は先生の人格にうたれ、その合理的な理論に感激させられて、それ以来西式の信奉者となったのである。勿論病気とも絶縁することになった。

人事不省の大怪我

1948 年 1 月 8 日私が工場に仕事をしていると、何の間違であったか、石油ヒーターのドラム缶が上から落ちてきて、私の前額を強打し、そのために私は人事不省となり、動くこともどうすることもできなかった。私が意識を回復したのは、自宅のベットの上になくなってからであった。

私は日頃から家族に対して、どんなことがあっても医者に連れて行ってはならぬと厳命していたので、この時も意識不明のままベットに横にされていたのであろう。

さて意識が回復したものの、自分の意志では自分の体は、四肢は勿論指一本動かさないあわれな自分であった。これにはさすがの気の強い私も、とんと弱ってしまった。

怪我をしたという噂がひろがって、親戚のものが集まって来て、こんどは医者に見せろ、レントゲンをとってもらえ、入院させろと騒いでいる。

私はここだと、肚に決するところがあつたから、断乎として入院を拒んだのである。そして家族を集めて宣言した。老妻には大小便の始末を、嫁には食事の支度を、そして長男には西式の運動を手伝って怪我の治療に当ることを命じたのである。

どんな怪我をしても、西式を忠実に実行していれば、必ず治るものだと堅い信念を、私は早くからもっていたから、前記のような処置がとれたのである。そして又、このことは家族たちにも十分理解させ信じこませておいたのである。

6ヶ月と2日たった日に、左足の親趾が動いたのである。私はこんな嬉しいことはなかった。それから日がたつにつれて、そこここが動くようになった。そして1年1ヶ月で自分で自動車を運転して外出できるようになった。

今でこそ私の世話している西支部には三号機を初めいろいろの西式の機械器具が整備され、所属クラブ員がこれを自由に利用できるようになってきているが、その頃は三号機などはまだ創案されていなかった。柿茶もなかったし、生食療法なども普及されていなかった。

私は六大法則と温冷浴と、そして食事といえ、私が嫁に命じて作らせるお粥くらいのものであった。勿論私は怪我と同時に2週間の断食を実行した。また私は自動車工場を経営していた関係上、機械に関しては専門家であったから、今日の家庭用の健康機のようなものを創案して作っていたので、それを十分に利用した。その後西先生がハワイにお見えになられた時、私の手製機械をお目につけたところ、これでよろしいとお言葉をいただいたのである。

体験談一ツ二ツ

次に私の長い西式生活から得た体験談を、二、三お話ししておきたいと思う。西式がきくとかきかぬとかいうのは、結局のところ実行と信念の問題にかかっているのである。実行しない以上西式を論ずる資格はない筈である。次に信念の問題であるが、実行すれば治るといふ堅い信念がないならば、これ又問題にならぬ。

私の知人に、中風で倒れてぶらぶらしている男がいた。私はぶらぶらしているのなら、クラブに来て三号機にかかるなり温冷浴に入るなりして、治したらどうだといっても、一向に実行しそうにもない。そのくせ治りたい一心から医者に通っていたらしいが、どうしても簡単には治らない。

そのうちに私のところに道場ができたので、車を都合して連れて来て、西式の処置をしたが、こちらが考える程効果があがらなかった。どうも御本人が心底から西式を信じ、西式でなるといふ気がないかぎり、効果があがらぬようである。

今一人は、西先生が最後にハワイにおいでになった日の、しかも先生の歓迎会の直前に倒れたからみてくれとのことであった。本人はクラブ員でないが、奥さんは熱心な信奉者であった。私は時間の都合をつけて見舞ったが、あばれるので手がつけられぬ。それに歓迎会の時間がせまって来たので絶対に注射をせぬこと、必ず浣腸をしてもらうことを条件として医者の方介になるように奥さんに話して別れた。医者は毎日通便があるのに浣腸をしてくれとはおかしいといったそうだが、奥さんの希望で浣腸してくれたそうだ。ところが医者も看護婦も驚く程の大量の糞便が出たそうだ。その大量には奥さんもびっくりされたそうだ。そのうちにあれ程あばれまわった行動もおさまって意識が平常通りに回復した。この方は倒れた本人よりも奥さんの熱心さが、御主人を救ったようなものである。

解 説

人事不省の大怪我と重篤な脳卒中が西医学によりきちんと回復したことが報告されています。理論と実習法を納得できる位研究した上で、きっと治るといふ信念と実行が大事だということが分かります。中風とか簡単に治らない疾病はその分時間が必要です。信じて続けることが解決法です。幸い西医学にはこれまで渡辺正医学博士、甲田光雄医学博士等により、難病治療の症例が多数ありますので、大変参考になります。現在、久留米の石井医師、東京の渡辺完爾医師が西医学で治療しています。